

大都市部における格差拡大の進行過程とその社会的帰結に関する研究

(6)近代東京の下層階級：アンダークラスの系譜

－三大スラム・四谷鮫ヶ橋の「残飯商」と地域特性－

早稲田大学 武田尚子

1 目的と方法 本報告は、歴史的アーカイブを用いた質的調査方法により、近代東京におけるアンダークラス集積地域の形成要因を探る。ここでは自営業者または被雇用者ではあるが、一般的な自営業者や被雇用者とは質的に異なる貧困状態にある人々をアンダークラスと呼ぶこととし、具体的に取り上げるのは、明治20年代に東京の三大貧民窟の一つ四谷鮫ヶ橋（現在の新宿区若葉町2、3丁目周辺）である。アンダークラスの集積という地域特性が生じた要因を探るには、固有の事例にフォーカスし多様なデータを集めて、地理的特徴、歴史の変遷、政治・経済・軍事的背景など多方面から諸要因の連関をていねいに読み解くことが必要である。本報告では、明治期の四谷鮫ヶ橋に特徴的だった「残飯屋」の存在に着目し、東京西部に布置された陸軍施設との関連について探る。使用した主要アーカイブは防衛省防衛研究所所蔵資料、東京市社会局刊行物、明治・大正期の新聞資料などである。

2 アンダークラスの「住」：家賃抑制と地理的・歴史的要因

この地は江戸郭外西方に広がる山手台地のなかの窪んだ谷間で、湿気が多い地域であった。江戸初期に伊賀出身の御家人集団（伊賀者）に知行地として授領され、下級武士が年貢米を得る農地だったが、江戸改造によって伊賀者は知行地への屋敷地移転、知行地縮小・年貢米減少を余儀なくされた。下級御家人は生計費不足の補填手段を必要とし、拝領屋敷地の一部を町人に貸して地代収入を得るようになった。地借、店借の町人層増加によって、この地は町奉行支配地に組み込まれ、鮫河橋谷町と称されるようになった。この地は山手のなかで「下級武士」が拝領した「悪条件の武家地」という点に地理的特徴がある。「山手の台地上の環境良好な大名屋敷」の近代以降の転換パターンと異なる。

先行研究によると、下級武士層は地代収入の権利を保持したまま条件良好の他地域へ転出し、幕末期には日稼ぎの流動的な店借層町人が集積していた。江戸期の武家地売買禁止で参考地価がないため、維新後の上地、地租改正事業で隣接地価の10分の1で売却された。地租低廉、環境劣悪のため、鮫河橋谷町は低家賃の長屋が連なる区域となった。地主も賃借者も流動性が高く、環境劣悪で推移した。日割りで支払い可能な低廉な長屋家賃は、流動的な下層階級の参入を促す誘因の一つになっていた。

3 アンダークラスの「食」：残飯処理ルートと政治・経済・軍事的要因

先行研究によれば明治20年代の貧民の支出構造の二大費目は家賃と食費で、エンゲル係数は70%を超える。鮫ヶ橋で食費抑制に寄与したのは「残飯屋」が供給する残飯である。鮫ヶ橋を対象に、明治26年に松原岩五郎が貧民窟探訪記、27年に高野岩三郎が統計的手法を取り入れた貧困調査、31年に横山源之助が探索記録を残している。いずれも「残飯屋」の存在に言及し、松原は残飯屋の詳細な参与観察を行い、高野は統計的視点で当時6軒の残飯屋があり、残飯利用は燃料費抑制に寄与し、竈がある世帯は極めて稀である等、同時代の貴重なデータを残した。各調査者の特徴を反映したこれら多様な実証的データに、本報告の主要アーカイブをつきあわせると次のような状況が判明する。

残飯の主要な供給源は、明治前期に鮫河橋近辺の東京西部に増加した陸軍の諸機関・施設（士官学校、兵営等）である。明治10年に政府による地租減額が実施され、歳費減少、各省予算削減により、陸軍省は各鎮台の裁量範囲の「貯蓄金」に「残飯代」を含む廃物売却代金を含め、野営演習費にあてること等を許可した。残飯売却代金は公的な陸軍会計処理に組み込まれ、近隣地域に残飯商を成立させ、競争入札が行われるようになった。一般人は忌避する残飯であるが、下層集住地域では食費・燃料費削減の方途として需要があった。軍会計と連動した鮫河橋周辺の残飯商は大正初期まで存続した。

4 今後の課題：アンダークラス研究へ示唆するもの

生産領域から排除されがちなアンダークラスであるが、再生産領域の廃物リサイクル、アンダークラスの生活構造まで視野に入れると、2個師団が駐屯する近代軍事都市東京の構造に組み込まれた存在であったことがわかる。下層階級の分析に再生産領域の視点が不可欠であることが示唆されている。